「幸福」をめぐる諸考察１
☆利己主義的快楽主義
☆公衆的快楽主義（功利主義）上
　　ベンサムの量的功利主義

様々な幸福感
　幸福主義的幸福観
　　快楽主義
　　利己的
　　公衆的（功利主義）
　　活動主義（自己実現説）
　反俗的・超俗的幸福観
　哲学的・宗教的幸福観（超越的）

幸福主義的幸福感＝幸福説と同じ
　現世的な幸福の実現＝最高善→人生の究極の目的・目標は何か?
　じゃあ幸福って
　　→快楽だ　快楽主義
　　→活動だ　活動主義

快楽主義 hedonism
　　人生の幸福とは喜びにある。できるだけ多く味わいたい。
　　倫理学の快楽→人生に喜びを与えるもの
　　快＝善、苦＝悪
　　苦の不在、善の不在
　　善＝快もしくは快をもたらすもの
　　悪＝苦もしくは苦をもたらすもの

気持ちのいい苦はない

人生の目的＝幸福＝幸福感＝満足感＝快楽
　利己的＝さしあたって自分だけ
　公衆的＝いや、他の人々も

利己的快楽主義 egoistic hedonism
　人生は、他人はどうあれ、とりあえず自分が楽しけりゃいいんじゃない。
　人を踏み台にしたり、蹴落としたり、しない。

アリスティポス（BC435 ～ 355）
　ソクラテスの取り巻き

快は＋　苦は-
快感に差はないんだ!!
快楽を積極的に求めていくんだ!!
積極的快楽主義
快楽には見苦しいものがあるが、快感そのものはいいものだ!!
刹那的
　幸福を求めちゃいけない。死ぬ間際にならないとわからないんだ!
　　(快楽の積み重ねが幸福だ!)
　今あるものからの快楽を追い求めることだ。

快楽は２つに分かれる
　精神的、肉体的
　肉体的快楽の方が強い

自分さえよければ、今さえよければいい→これは、貫き通すことが難しい。
他人の苦しみ、過去や未来の事を気にしない→これは簡単でない。
どんなに落ち目でも、今の自分から快楽を引き出すことができるか。

快楽主義のパラドックス(逆説)
　注意しないと快楽は、求めれば求めるほど、苦痛がやってくる。
　無反省に快楽を追っていくと、欲望の奴隷になってしまう。
→思慮と心の強さが必要
　グルメの苦痛「確かにうまい、けどあれに比べれば･･･。」
　欲望の増大に苦しめられる。

時代背景がきついときはどうするの?

エピクロス（BC.341 ～ 270）
精神的快楽主義　安定的
幸福の２つの要素
　アタラクシア　心がかき乱されていない、静かな安らぎの状態
　　(→ねこの昼寝のようなものかな?)
　アポニア　肉体の無苦

アリスティポスと反対の生き方
「パンと水だけでも私は神と幸福を競いうる」
贅沢の中に幸福があるのではない、慎ましい生き方に幸福がある。
金がかからない。健康にいい。
　(→魚柄仁ノ助さんみたいな生き方かな?)

アタラクシアの維持の最大の問題点
死は我々には関係がない。
生きている限り、死はまだやってこない。
死がやってきたとき、もう自分がいない。

仏教的悟りに近いのでは･･･。
膀胱結石で死ぬ。
　肉体の苦痛は悪。
　なので、ワインを飲んで、熱い風呂に入り、友達に手紙を書いて、死んでいった。

どちらの快楽主義も突き詰めて、貫き通すことは大変。
エピクロスの考え方＝安楽死、尊厳死の考えに近いのでは･･･。

利己的快楽主義の欠点
アリスティポスの思想　朝から晩まで快楽を追っていたら、いつか空しくなるのでは。
エピクロスの思想　年取ってからの思想じゃないのか？

公衆的快楽主義 universalistic hedonism
功利主義 utilitarianism
J.ベンサム Bentham
英国 1741 年～ 1832 年
この間、快楽主義は埋もれていた･･･。→キリスト教社会だった
　弾圧された→例　マルキド･サド

市民革命、産業革命の時代→大英帝国の時代
できるだけ多くの国民が幸せになるべきだ。

ベンサムの人生
法律家一族に生まれる。
父は不動産売買で財をつくる。
３～４歳から英才教育を受ける。
読書好きの少年。身体が弱かった。

人生の欠如感から哲学、思想が生まれる?

７歳「テレマコスの冒険」を読んで非常に感銘を受ける。
「最大多数の最大幸福」の精神を植えつけられた･･･。
母方の祖母の家にしばしば預けられた。←名家
感受性豊かな少年

政治的には、王党派と民主派の争いの時代。

オックスフォード大に入学
虚栄と怠惰に満ちた、社交クラブに過ぎなかった。
貴族の娘に振られて、貴族嫌いになった。→独身を貫いた。

動物愛護法成立に努力。猫を飼っていた。

「最大多数の最大幸福」幸福＝快楽、満足感
「道徳及び立法の諸原理」1789 年
-自然は人類に２人の主権者を置いた。快楽と苦痛である。-

公平に分配するということを、ベンサムは入れることが出来なかった。
最大多数の最大幸福には、自分を入れてよい。
一人一人の総和で幸福を考える。全体の幸せではない。
→利己的快楽主義を基本として、それを拡張した理論だから。
→国家主義ではない。

「最大多数の最大幸福」では、分配の公平性が保証されない。
他人の快楽･苦痛を扱うことで、他人の快楽･苦痛を測定しなくてはならない。
→そんなものは、測定できない。自分でも快楽･苦痛の予測ができないのに。

そんなもんは、気にしなくていい。そういう方向性を目指すってことで･･･。
と考えればよい。

快楽と苦痛の計算方式（７つの基準）
強度
持続性
確実性　来るか来ないか、より確実に来る
遠近性　すぐくるのか、あとからやってくるのか
多産性　別の快楽につながるか?
純粋性　苦痛が混じってないほうがいい
範囲　　より多くの人に影響を及ぼす

人それぞれ、好みがあるので実際の計算はかなり難しい。
だから、基本的原理ということで･･･。

貧乏人の一万円と大富豪の一万円の問題
近代民主主義の最初の段階であったから、正当な論理だった。
民主主義の成熟段階において、ことさらに言い立てれば、

少数者の抑圧につながりかねない。
数とか量で、倫理の問題を判定できるのか?

利己的快楽主義がら公衆的快楽主義に移行できるのか
ベンサムは「制裁理論」 sauction を考えた。←快苦の源泉
自然的：食べ過ぎると、腹痛や下痢、生活習慣病になる。
政治的：やりすぎると、司法のご厄介になる。
道徳的：やりすぎると、村八分になる。
宗教的：罪の意識をかんじる。

量的功利主義
　一人ひとり平等に一票を持っている。快楽は平等だ。
→快楽や幸福の質の差を考えない。

快楽主義の基本である「快楽自体は善」はほんとうなのか。
精神障害者の人生と交換することがいいことか。
まったりしている猫の人生と人の人生を交換することはいいことか。
無害な麻薬を肯定するか→猫のまたたびはどうなのか

考える枠組みを提供することが「倫理」である。
明日、質的功利主義から